



戦時中に使用されていた「医務室（硫黄島）」。

戦後世代だから考える、 “今”やるべきこと。

終戦から80年、ベトナム戦争終結から50年という節目である令和7年。過去の大戦を経験された方々が高齢になられている“今”こそ、忘れ去られようとしている真実を受け止めていかなければなりません。戦争を風化させるにはまだ早すぎます。残酷で悲惨な戦争を絶対に起こしてはいけないということを、被爆国である我が国こそ、世界に発信していく使命があるのです。戦後生まれの人間として、自らが見て、聞いて、触れたことを後世に伝えていくために、平和を考える実行委員会を運営しています。

川畑 篤子さん (77)

北本市在住、鹿児島県大隅半島出身。叔父が26歳のとき硫黄島で戦死したという過去を知り、亡くなった父への親孝行を兼ねて行動したいと決意。また自分の肌で平和のありがたさを感じたいと考え、厚生労働省の施策を活用し、叔父の遺骨のDNA鑑定を依頼。同時期に戦没者の慰霊巡拝に同行する機会を得て、硫黄島へ初めて上陸。以降、毎年参加しており、今年は4回目の巡拝となる予定。

北本市老人クラブ連合会から北本市平和を考える実行委員会委員として選出され、現在は2期目の会長を務める。



父の50回忌であった3年前、テレビで放送していた硫黄島の特集を観たことが、硫黄島での悲惨で苛烈な戦いを身近に感じるきっかけとなりました。

後に、青年学校の教師だった叔父が、独身26歳のときに硫黄島で戦死しているという事実を知り、人から話を聞くだけでなく、自分の目を見て、肌で感じて、平和のありがたさを知ることが大事だと考え、父と叔父のために何か行動したいと決意し、厚生労働省が所管する施策を活用して、叔父の遺骨のDNA鑑定を依頼することにしました。

父の大事な弟である叔父や、父への親孝行のために行動することができたこと、自分の手がかつての大戦に少しでも触れたことで、より一層、平和を願う気持ちが強くなったことを覚えています。

硫黄島から、北本まで。 想いが紡いだ“縁と絆”

私は7人きょうだいなのですが、うち一番下の弟が元自衛隊員で、硫黄島に勤務していたとき、叔父が所属していた『歩兵第145連隊』の隊員が亡くなった現場を発見した、といったことがありました。弟は現場でお線香をあげてきたそうですが、以来、夢で叔父が毎晩会いに来て、とても喜んでいと話していました。硫黄島に関わった人々の中では、そういった逸話が多くあるそうで、それだけ人の想いが強く残る場所なのだと感じます。また、一番下の弟は、きょうだいの誰とも顔立ちが似ていなかったのですが、後に発見された叔父の写真と見比べると、とてもよく似ていたのです。こういった巡り合わせに、運命のようなものを感じました。

地元の鹿児島、硫黄島、そして現在住む埼玉県や北本市の人々。平和に対して自分にできることは何かと考え、行動する中で、様々な人々と多くの感動的な出会いがありました。平和でつながる出会いを大事にし、行動や想いを継続していくことが大切です。

今年度、浅野さんともつながりができました。こういった活動を途絶えさせず、子どもたちや親世代に受け継いでいくことが、戦争を体験した世代、また、戦争体験者を親にもつ団塊世代の使命だと考えています。

「戦争は大変だった」という単なる同情や感動で終わることなく、着実に平和尊重の意志を後世へと受け継ぐことで、恒久的平和の実現への足掛かりになると考えています。



川畑さんの叔父・鉄夫さんと、歩兵第145連隊の慰霊碑。

平和をともに考え、発信する 『北本市平和を考える実行委員会』 委員募集中。



幅広い年齢層への平和意識の醸成と拡大を推進するため、『北本市平和を考える実行委員会』を運営しています。

実行委員の皆さんには、それぞれの地域、団体、企業等において、戦争や原爆の悲惨さを伝える写真・絵画の展示、戦争体験を聞く会、映画会、演劇、講演会など、平和意識の向上を図るための事業や活動の推進にご協力いただいています。

平和への意識を醸成し、平和の維持拡大に寄与する、『北本市平和を考える実行委員会』の活動に、あなたも参加しませんか。

北本市平和を考える実行委員会

昭和64年から続く、市を事務局として、公募委員、各種公益団体、企業等から推薦された皆さんにより結成された組織。市の平和啓発事業の企画および運営支援とともに、それぞれの分野で平和都市宣言に基づく平和思想の普及啓発を推進している。

市民課市民相談担当 (☎ 594-5529)



平和を『考える』。

硫黄島（小笠原諸島）への慰霊巡拝に精力的に参加されている、北本市平和を考える実行委員会 川畑篤子委員長にお話を伺いました。